原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百一号

原告団レポート

CO患者——野田　幹雄さん

古びた大きな石炭ストーブにも火が入っている。昭和のはじめ頃に建てられたのであろう旧〝武徳殿〟。かつては青少年が剣道や柔道に通ったところだが、今はCO患者の回復訓練所となっている。半分が作業所で、残りのスペースが控所。別に体育館（旧講堂）や事務所、診察室などがあるが、なにしろ古い建物、体操をしていると床がきしむのがわかる。

定年退職などで、ここに出てくるCO患者の数も減った。一時のように竹ミス作りや、アルバム作りなどの作業もない。

野田幹雄さんは、この万田訓練所の掃除当番である。

昭和四十六年十月に、新港作業所とともに開設されたこの作業所へは、みんなより遅れて入所している。彼の場合、病状が思わしくないこともあって、午前中の勤務で午後は自宅に帰る。

おそい結婚

自宅は、大牟田市大字歴木二八三の二。四十七年に労災病院で治療打ち切りとなり退院してから、奥さんの実家（大牟田市八尻町）に身を寄せていたが、昨年八月二日に移った。

もともと長兄が建てた家だが、勤務の都合もあり熊本の方へ転居したので譲り受けたもの。

彼はここから自転車で、荒尾の万田にある訓練所まで通って来る。雨の日はバイクに頼らざるを得ないが、訓練をかねてもっぱら自転車を愛用している。もっともバイクに乗っていて、途中で何回かフラーッとしたこともあり、あぶないと感じたからである。

野田幹雄＝昭和十四年十月生れ四十二歳。家族は妻の利子さん（十七年生れ）、長女千晶ちゃん（四十八年生れ、小三）、二女晶子ちゃん（五十二年生れ、保育園）の四人暮らし。

妻の利子さんは看護婦さん。労災病院に勤めたのち、今は「大牟田看護学校」で教務の仕事をしている。

二人が知り合ったのは、野田さんが入院中の労災病院でのこと。その労災病院を退院してから、四十七年の四月に二人は結婚。爆発以来の療養の中で、遅れた結びつきではあった。

利子さんが午後の勤務が多いために、子供たちとはすれ違いが多いのだが、子供たちも小さい時から保育園に預け、夜、母がいなくても「もう、なれているのでは」という。

爆発前、幹雄さんは大牟田市小浜南社宅二十六棟に住んでいた。父猪吉さんが終戦後、勤めていた東洋高圧をやめて三川鉱に入社。やはり食糧の特配と社宅が魅力の時代だった。なにせ九人家族だったというから、さぞ大変だったと思われる。

坑内労働へ

市内の石炭中学を卒業した幹雄さんが、定年間近かな父と入替採用で入社したのが、三十一年十一月。最初は坑外勤務で職種は外雑といって、坑内へ下げる諸材料を扱う仕事だった。

その頃は炭鉱で働く人も多く、職場もにぎやかで活気があった。体は大きくはないが、頑強そのもの。趣味といえば運動、スポーツでは万能選手だったと当時の友人たちはいう。マラソンでは大牟田市の青年団大会に出場したり、ソフトボールでは同じく市の大会に出て優勝したこともある。山登りにも出かけた。雪の小岱山に登って道に迷った思い出も——。

とかく「体を動かすことが好きだった」と語る幹雄さん。

あの三十五年の三池闘争の時には、青年行動隊の一員として頑張った。ほとんど三川鉱の前にあった三川講堂に寝泊りしていたが、一家の生活が極端に苦しかったことをのぞけば、若い仲間と語り行動することは、彼にとっては新しい経験であると同時に、胸をたぎらせる青年時代の最高の思い出となった。

三池闘争の終結は、彼にも転機となった。

その日は二十一卸に配役されて日午後三時以降——。彼の記憶は完全に途絶える。

—万田作業所の玄関で—

爆発に遭遇

彼もまた、その一人であり三六年に坑内機械工となり、切羽重要工事という、坑内機械の運搬、据付け、撤去という仕事をするとになった。重労働で有名な職場である。

とにかく体がきつかった。家に帰ると、ただひっくり返るだけという日がつづいた。

そして運命の三十八年十一月九日午後三時以降——。彼の記憶は完全に途絶える。

その日は二十一卸に配役されて

回復が遅い

野田さんは五年間近く大領病院に入院、そのあと労災病院に入院、四十七年三月の治療打ち切りで万田訓練所へ移ったが、その間治療継続のための異議申請も行なったが却下されたのである。

その頃のことを同僚の白木光雄さんは、「手がぶるぶる震えよったですね。あれは自律神経障害でしょうね」という。

とにかく回復が遅いのが腹立たしい様子で、「体もいうことをきかないが、考える力がない——」と。利子さんが、あまり夕刻に家にいないために、ときどき買物などを頼むのだが、スーパーに出掛けても何千何百何十円という計算ができない。紙にでも書けばなんとかできるが暗算が苦手。だから大きな金を出すことにしている。

あるとき、米を買っておくように頼まれたが、見事に忘れてしまった。それでご飯なしの日が何日か続いた。これも奥さんとすれば一種の訓練のつもりかも知れない。家のペンキ塗りをはじめたが、これも途中でやめた。

若い頃は、よく本を読んだ。三川の図書館にはしょっちゅう通っていたというし、映画も好きだった。今のようにテレビはなかったにしても、話のもようからまじめな性格で、勤勉であったことがうかがえる。

今では本を買ってきても、まず一冊を読んでしまうことはない。

痛む後遺症

「午後はどうして過すの？」と聞くと、「別になにもしない。寒いときはコタツに入ってテレビを見る。子供と一緒にマンガを見ているが寝てしまう」という。

夕食の準備は、奥さんがして置くので別にすることもない。煙草も喫まず、もちろん酒も飲まない。

いったいこれが、世間でいう働き盛りの、四十二歳の男の生活なのだろうか。神経の中枢をCOガスで冒され、治癒と認定された男の姿なのか。

体の回復を願う気持はつよい。今まで万田訓練所ではバトミントンや卓球に励んだこともあったが、今はやめている。数人の仲間とマラソンの練習（ジョギング）をやり、組合や地評の駅伝などでも走ったが、それもなぜかやめている。「どうも気持がのらんとですよ、みんなと一緒ならなんとかやれるのだが——」という。

青春を返せ

「裁判で第一審が終ったとしても、まだ十年以上は働かなければならないが、この体でどうなるのか心配です。裁判に勝つことはもちろんですが、職場のことも心配です……」

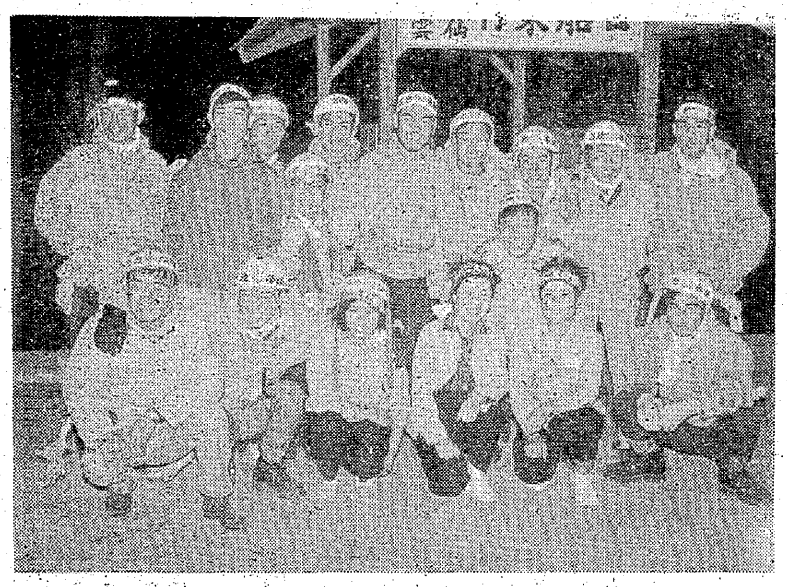
裁判については、「本当は金よりも体を返してほしい。金でしか解決できないとすれば残念だ」

「人生の一番大切な青春時代を、病院で過したことがくやしい——」

この野田幹雄の心の痛みに、会社はどう応えようとするのか。

万田訓練所

小雨が降り続き〝花冷え〟のする四月のはじめ。その日の万田訓練所では農園作業にも出られず、〝待機〟ということで、録音によるラジオ体操の最中であった。



S35年三池闘争時に。（後列右から2人目が野田さん）

S38年爆発の年、職場の仲間と太宰府で。
（後列右端）

奪った青春をかえせ

趣味もなく、走ることもやめてしまった

治療打ち切りで、この体